

食事場面における1歳児と保育者の相互作用

河原(中村)紀子

Toddler-caretaker Interactions at Lunchtime in the Day Nursery

KAWAHARA (NAKAMURA) Noriko

問題と目的

1歳代は、身辺自立へ向けて基本的な生活習慣を身につけることが課題となり始める時期である。中でも、1歳児の食事場面では必要なものを必要なだけ食べさせようとする意図を持った大人と子どもが「食べる」ことをめぐって様々な相互作用が展開される。例えば、食事場面における幼児と母親の相互交渉について、子どもが食べているか否かという生理的状态と母親の発話との関連について、子どもが食べている場合には食べることのみならず、より文化的色彩の強い事項へと母親の話題が及ぶことなどが明らかにされている(外山・無藤, 1990)。

1歳児の保育における食事指導においては、「嫌いなものを食べない子、食が進まない子」への指導が実践上の課題となっている(金田・柴田・井坂, 1984; 金田・井坂, 1990など)。金田・井坂(1990)では、保育園における1歳児クラスの食事場面の観察資料により、望ましい食事指導のあり方を検討している。その結果、保育者が、「おいしい」という共感関係を広げる中で食物への抵抗を乗り越えさせること、他児との「おいしいね」という共感的関わりを持つことなどが子どもの食への意欲を引き出すために重要な働きかけであると指摘している。しかし、金田らの研究では、それらの共感的関わりの変化過程については今後の検討課題となっている。この「嫌いなものを食べない子、食が進まない子」への指導とは、より具体的には、保育者が食べさせようと働きかけたことに対し、1歳児が拒否行動を示し、それに対しさらに保育者が働きかけるという相互作用場面において生じる問題である。したがって、1歳児における要求-拒否行動との関連で検討することが必要である。

山田(1982)は、0歳から2歳にかけての要求-拒否行動の発達について、ある種の行動形式が別の行動形式へと単純に置き換わるのではなく、1歳2か月から1歳8か月をピークに多様な行動が複合的に用いられ、二語文の出現する1歳9か月から言語中心の使用になることを明らかにしている。則松(1999)は、食事場面の母子相互交渉における拒否行動の生起率について0~3歳までを横断的に検討し、13か月群では7か月群と比べて身体的拒否が増大すること、25か月群では13か月群と比べて身体的拒否は減少し言語的拒否が増加すること、そして37か月群になると言語的拒否も減少することを指摘している。このことから1歳初めから2歳頃まで

の約1年間は、身体的拒否から言語的拒否へ変化するとともに、全体としては拒否行動の生起率が増加する時期である。

本研究では、保育者の「食べる」ことを促す働きかけに対し1歳児が拒否を示す場面を中心に、食事場面で展開される保育者の働きかけとそれに対する子どもの反応の相互作用過程を詳細に分析することを目的とする。その上で、1歳児と保育者の相互作用の変化過程を明らかにし、それに応じた1歳児の食事指導上の留意点を提起する。

方 法

1. 観察対象児

京都市内の保育所（園）に在籍する1歳児3名。

A児：女児 1995年8月31日生まれ 第5子（N保育所）

B児：女児 1995年10月23日生まれ 第1子（K保育園）

C児：男児 1995年11月4日生まれ 第1子（K保育園）

3名とも出生後特記すべき既往症はなく、新版K式発達検査の結果、正常範囲内であった。

2. 観察期間

1996年9月から1997年10月まで。いずれの対象児も12か月から23か月まで、毎月1回、計12回、昼食時の観察および発達検査を実施した。

観察期間中の対象児の所属クラスを表1に、観察期間中の保育体制についてN保育所およびK保育園それぞれ表2に示した。

表1 対象児所属クラス一覧

	12か月	13か月	14か月	15か月	16か月	17か月	18か月	19か月	20か月	21か月	22か月	23か月
A 児	0歳児クラス						1歳児クラス					
B 児	0歳児クラス						1歳児クラス					
C 児	0歳児クラス						1歳児クラス					

表2 観察期間中の各クラスの保育体制および食事時間の介助の特徴

	0歳児クラス	1歳児クラス
N保育所	子ども（障害児1名含む）8名 保育者（パート1名含む）3名	子ども（障害児1名含む）8名 保育者 2名
	子どもと保育者は机を挟んで向かい合い保育者一人で3名の子どもの介助を行う。	食事開始後しばらくは、保育者一人で3～4名の子どもの介助を行い、その後子どもの食事進行状況により適宜移動し子どもの正面や、横位置から働きかける。
K保育園	子ども 5名 保育者（パート1名含む）2名	子ども 12名、保育者 3名 B児20か月、C児19か月以降 子ども 15名 保育者（パート1名含む）4名
	子どもと保育者は机を挟んで向かい合い（90°位置も含む）保育者一人で主に2～3名の子どもを担当し介助を行う。	保育者は、必要に応じて適宜移動し子どもの正面からあるいは横位置から働きかける。

3. 観察手続き

観察者は月2～3回の間隔で、午前9時頃から保育に参加し、対象児と慣れるように心がけた。

食事場面では、日常的な対象児と保育者の行動を観察するために、観察者は非参加的立場をとり、保育室で、給食の準備が始まり机と椅子が出された時点から食事終了までを、8ミリビデオカメラで記録した。ビデオカメラは三脚で固定し、対象児と対象児に対する保育者の行為が撮影できるように設定した。原則として、食事内容が米飯、主菜、汁物という献立の日に観察を行った。

また、対象児の発達の変化を把握するために、食事場面の観察と同日の自由遊び時間に新版K式発達検査を実施し、保育の中で気づいた点は随時メモを取り、保育日誌等も参考にした。

4. 分析の方法

食事開始から終了までの全過程を分析対象とした。その中から、1歳児と保育者の相互作用が展開される場面として、保育者から子どもへ働きかける場面、および子どもの発声・言葉、身ぶりに対し保育者が対応する場面を、時系列的にひとまとまりのエピソードとして取り出し整理した。エピソード総数は、A児が112、B児が108、C児が101であり、「食べる」ことを促す保育者の働きかけに子どもが拒否を示した場面（以下、「拒否場面」とする）を含むエピソード数は、A児が39、B児が46、C児が74であった。

結果と考察

「拒否場面」における保育者の働きかけとそれに対する子どもの反応の発達の変化から、12か月から23か月までの1年間を3つの時期に区分した。各事例ごとの時期区分を表3に示した。

表3 対象児ごとの時期区分

	12か月	13か月	14か月	15か月	16か月	17か月	18か月	19か月	20か月	21か月	22か月	23か月
A児	第1過程				第2過程				第3過程			
B児	第1過程					第2過程			第3過程			
C児	第1過程						第2過程			第3過程		

以下、「拒否場面」における保育者の働きかけとそれに対する子どもの反応が特徴的に現れているエピソードを取り上げ、各時期ごとに考察する。

1. 保育者の働きかけとそれに対する子どもの反応の発達の変化

(1) 第1過程——保育者がつくる雰囲気子どもが同調してしまう時期——

この時期は、「拒否場面」においての、アクセントをつけた言葉かけや歌にのせる働きかけとそれに対する子どもの反応が注目された。

①アクセントをつけた言葉かけ

エピソード1は、保育者のアクセントをつけた言葉かけにより、それまで拒否していた保育

者の働きかけを子どもが受け入れるようになった場面である。

〈エピソード1：アクセントをつけた言葉かけの例 C児13か月5日 0歳児クラス〉

C児はこの時期、自分でスプーンを使って食べることは難しく、手づかみで食べることが中心で、そのため保育者の食べさせる援助が行われている。

C児の右斜め後ろで他児の食事の介助をしている保育者の方へ手を差し出している。そこへ、保育者が、おかず（大根）をのせたスプーンを差し出し、次のように展開した。

C児：そのスプーンを手で押し返し、「ンー」とうなりながら首を振る。

保育者：次は鶏肉を手で持って差し出す。

C児：口をつぐみ、首を振る。

保育者：鶏肉をスプーンにのせて差し出す。

C児：保育者の手を払いのけ、身体をそらしながら首を振る。

保育者：少し怒った口調で「C」とC児の手を引っ張り、「かっこいいとこ見せてなー、Dちゃん（他児）見てるでー」と言う。

C児：首を左右に振っている。

保育者：「C、大きいお口あ〜んってできるかなー」とスプーンを差し出す。

C児：急に大きな口を開けて食べる。

保育者：笑う、「かっこいいーC」と言う。

ゴシック部：他児との関係をつくる保育者の言葉かけを示す。これは第3過程で取り上げる。

エピソード1は、差し出す食べ物を変えたりしながら何度か食べさせようとする保育者の働きかけに対し、C児は首を振るなど拒否していたにもかかわらず、「あ〜ん」を強調した保育者の言葉かけによって、急に大きな口を開けて食べた場面である。ここでは保育者のアクセントをつけた言葉かけにC児の口を開けるという行動が誘発され、子どもの「拒否」行動が消失してしまっただと考えられる。

②歌にのせる働きかけ

エピソード2は、保育者の歌にのせる働きかけにより、それまで拒否していた保育者の働きかけを子どもが受け入れるようになった場面である。

〈エピソード2：歌にのせる働きかけの例 A児14か月14日 0歳児クラス〉

A児はこの時期、自分でスプーンを使って食べることは難しく、手づかみで食べることが中心で、そのため保育者の食べさせる援助が行われている。また、保育者が食べさせようとしているご飯はA児にとって嫌いな物ではないが、お汁は特に好きな物である。

A児が手づかみで食べているところへ、保育者がご飯ののったスプーンを差し出すが、A児は横を向き食べない。その後、次のように展開した。

保育者：「A児ちゃんのお口はどんなお口」歌いながらスプーンを差し出す。

A児：保育者の言葉にハッとした表情で保育者を見る。

保育者：歌った後に「バックーン」とご飯をのせたスプーンを差し出す。

A児：両手でお汁碗を持って差し出すようにする。

保育者：「これがいいの？」とお碗を受け取り、「これ、キレイキレイしたげよ」と言ってさらえる。そしてまた「A児ちゃんのお口はこんなお口」と歌いながらスプーンを差し出し「パッーン」と言う。

A児：差し出されたスプーンを口へ入れ、食べる。

このあとも「Aちゃんのお口は」などと歌いながら言葉かけすることでA児は差し出されたご飯を食べる。

エピソード2では、保育者が歌にのせる働きかけに対し、子どもはハッとした表情で保育者の方を見たり、拒否していたご飯も食べるようになった。保育者が歌をうたいその場の雰囲気を変えたことによって、エピソード1と同様に子どもの「拒否」行動は消失してしまっただけではないかと考えられる。この時期には、「拒否場面」においてアクセントをつけた言葉かけや歌にのせるなどによってつくられるその場の雰囲気に子どもは同調してしまい、保育者の働きかけを受け入れることが特徴である。これは、他者の働きかけを拒否する背後にある自分の要求が、他者からの働きかけ（要求）により曖昧になってしまうためと考えられる。この頃、A児はお汁が欲しくてぐずっていると、保育者がそれとは知らずにA児の足を整え確認すると、A児は一時的に泣きやんでしまうことも見られた。つまり、自分の要求とは異なる対応をされたにもかかわらず、保育者の働きかけに一時的に同調してしまっただけである。これらは、「他者のプレイフルな情動・気分への巻き込まれ」（木下、1998）と同様の特徴を示し、自分の要求と他者の要求とが混沌としている状況と考えられる。したがって、この時期の「拒否場面」では、注意をそらすなどの「ごまかし」がある程度利くため大人の楽しい雰囲気をつくる工夫が功を奏すると言えるだろう。

(2)第2過程——自分と他者の要求を対比的に捉え、対提示に対し「選択」し始める時期——

この時期は、第1過程とは異なり保育者が楽しい雰囲気づくりをしても、子どもは保育者の働きかけを強く拒否するようになった（エピソード3参照）。

〈エピソード3：楽しい雰囲気の働きかけを子どもが拒否する例 C児18か月2日 1歳児クラス〉

C児はこの時期、自分でスプーンを使って食べるようになっており、保育者の食べさせる援助はあまり行われなくなっている。

C児：スプーンでコップをつつく。

保育者：C児のスプーンを取り上げ、「Cくんはどうすんねん、お肉全然食べてへんやん、ちょっと食べて」とスプーンを差し出す。

C児：身体を後ろへ引くようにして、目をつぶって嫌だという表情をしながら、保育者の手を押し返すようにする。

保育者：「ポッポッポッポー」（おかずの入った食器の側面に汽車の絵が描いてある）とミートボールののったスプーンを差し出す。

C児：保育者の手を払いのける。

保育者：「Cちゃん、大きなお口でアブしよー、お馬ちゃんのお口でポッポッポッポー」とスプーンを差し出す。

C児：（お茶を飲んでいたが）保育者の声でそちらを見るが、保育者の手を払いのける。

保育者：「見ててな、Eちゃん（他児）も見ててねーって、Cちゃんこんだけだけ食べておしまいしようか」と言う。

C児：嫌な表情を示しながら軽く首を振り、コップを指さし保育者を見て「アー」と発声する。

保育者：「これ食べておしまいしようか」と、ミートボールののったスプーンを差し出す。

C児：首をすくめて嫌がる。

保育者：「お肉も、お野菜も何も食べてへん、何食べたいの？、これ食べておしまいしよ」とミートボールののったスプーンを差し出す。

C児：何食べたいのと言われ、保育者を見てコップを指さすが、スプーンを差しだされる横を向き、嫌な表情をして首をすくめる。

この後も何度かスプーンを差しだされるがC児は拒否していた。

斜体部：動物マークをとり入れた保育者の言葉かけを示す。これは、第3過程で取り上げる。

ゴシック部：他児との関係をつくる保育者の言葉かけを示す。これは、第3過程で取り上げる。

エピソード3から、この時期になると、食器に描いてある汽車の絵と関連づけたリズムミカルな言葉かけ、つまり保育者の楽しい雰囲気づくりは、子どもを保育者の方に注目させることにはなっても、第1過程のように保育者の働きかけを受け入れる契機にはならなくなるのがわかる。また、C児は食べさせようとする保育者の働きかけを拒否しながら、自分の欲しい物を指さしたり、「何食べたいの？」と聞かれてコップを指さしたりするなど、他者の働きかけ（要求）を一方向的に拒否するだけでなく自分の要求と対比させて捉え始めている。そのため、この時期になると、子どもはその場の雰囲気に単純には同調しなくなるのであろう。

③子どもに「選択」を促す働きかけ

エピソード3で指摘した特徴と関連して、保育者の「選択」を促す言葉かけで、子どもが自ら食べるようになることが注目された（エピソード4参照）。

〈エピソード4：子どもに「選択」させる働きかけの例 A児19か月11日 1歳児クラス〉

保育者はA児と机を挟んだ向かい側から働きかけている。A児はこの時期、自分でスプーンを使って食べるようになっている。

保育者：「Aちゃん」とご飯ののったスプーンを差し出す。

A児：後ろを向く。

保育者：「あっ、Aちゃんのお口どんなお口？」と言う。

A児：後ろを向いたまま。

保育者：「りすさんのお口かなーAちゃん」とA児を前に向かせようとし、「いくよー」と言う。

A児：前を向く。

保育者：「リスさん見ててねー，リスさん見ててねー食べるからねーAちゃん」とスプーンを差しだし、「はい」と促す。

A児：また，横を向く。

保育者：「Aちゃん，ほんなら自分で食べて，これ持って」と持たせようとA児の手に促す。

A児：手を引っ込める。

保育者：「これ嫌なん？，これあるし嫌なん？」とスプーン上の食べ物を指さす。

A児：保育者の持つスプーンを見ている。

保育者：「白いご飯にしとく？，ほんならはい，Aちゃん」と白いご飯をすくってスプーンを差し出す。

A児：身体を後ろへ引き，保育者のスプーンをよける。

保育者：「これは？」とスプーンを差しだし続ける。

A児：身体を後ろへ引きながら「イヤ」と言う。

保育者：「ほんならこれか？，こっち？」とスプーンで皿を差すようにしながら聞く。

A児：皿の中から手で取って食べる。

斜体部：動物マークをとり入れた保育者の言葉かけを示す。これは，第3過程で取り上げる。

この「選択」を促す働きかけは第1過程でも見られ，それに対しC児（15か月）は不特定の所を指さすという反応を示していた。しかし，この時期になると，エピソード4のようにA児は，自ら選んで食べることにへと変化した。この時期，A児は発達検査場面でも鉛筆を2本提示して「どっちにする？」と選択させると，それ以前では両方取っていたが，18か月から一方を選択し始めるなど，対提示に対し自ら選択することが他の場面でも見られ始めた。したがって，エピソード4では，自ら選んで食べることを求めたために生じた「拒否」と解釈できるかもしれない。

④食べ物を「限定」する働きかけ

この時期，食べ物を「選択」させる働きかけ以外にも，保育者が食べる物を「限定」することによって，子どもが自ら食べるようになることが注目された。（エピソード5参照）。

—〈エピソード5：食べ物を「限定」する働きかけの例 C児18か月2日 1歳児クラス〉—

C児はこの時期，自分でスプーンを使って食べることができており，保育者が食べさせる援助はほとんどなくなっている。しかし，C児はお肉が嫌いであるこの時点でご飯しか食べておらず，保育者が何度も食べることを促すが食べない。食事も終了に近づいているため少しでも食べさせようと保育者が促す場面である。

保育者：「Cちゃん，おロアーンして，おロアーンして」とスプーンを差し出す。

C児：横を向く。

保育者：「Cちゃん、もうこれだけ食べたならえーわ」とミートボールをのせたスプーンだけを机上のエプロンの上に置き、他の食器はすべて片づけながら、C児の背後から「それだけあぶーして、それだけあぶーしてや」と言う。

C児：スプーンを持ち食べる。

保育者：「あー、かしこー」と言う。

C児：口動かし食べている。

エピソード5では、「これだけ食べたら」という言葉かけとともに、保育者が机上に食べ物をのせたスプーンだけを置くという状況をつくった。このことはC児にとって「これだけ食べる」という目標を捉えやすくするとともに、「食べたら終わる」という見通しを持たせたとと思われる。エピソード5を、対提示に対し自ら選択する、というこの時期から見られた特徴との関連で見ると、はじめの働きかけは単なる「食べる」か「食べない」かを選択する場面で、子どもは「食べない」を選択していたが、食べ物を「限定」する働きかけにより「食べたら終わる」か「食べない」かを選択する場面へと変化し、子どもは前者を選択したとも考えられる。

以上のように、この時期には自分の要求と他者の要求とを対比的に捉え始め、対提示に対し自ら選ぶことが可能になるとともに、子ども自身が行動を決定する際にも、「対の関係」の一方を選択することで他者との受容的關係を結ぶようになる。

(3)第3過程——自我関与した物や他者を媒介に共感関係を結ぶ時期——

この時期には、子どもの「動物マーク」や他者を媒介とした保育者の働きかけが注目された。

⑤「動物マーク」を媒介とする働きかけ

「動物マーク」は、両保育園（所）とも、子どもが自分の物を他児の物から区別できるように、各自のロッカー等に動物の絵を貼るという取り組みの中で用いられている。

エピソード6、7は、この動物マークをとり入れた保育者の言葉かけにより、それまで拒否していた保育者の働きかけを子どもが受け入れるようになった場面である。

—〈エピソード6：動物マークを媒介とする働きかけの例 B児 18か月28日 1歳児クラス〉—

食事中、一つの机にB児を含めて6人の子どもが一緒に座り、保育者はB児の右斜め前から働きかけている。B児の動物マークはアヒルである。

保育者：「B、ご飯食べてやー」と言う。

B児：保育者の方（右斜め前）を見、スプーンを持って食べる、食べると保育者を見る。

保育者：「あっかっかしい、かっかしいなー、B」「Bのヒヨコさん見てるでー、Bのアヒルさん見てるでー」と言う。

B児：汚れもの入れのバケツ（動物マークが貼ってある）がある方を見る。

保育者：「Bちゃん、上手かなーって、はい」とスプーンを差し出す。

B児：食べずにじっと保育者の方を見て、スプーンを手で押し返そうとする。

保育者：「じゃあ、自分で持って、自分で持って食べ」とスプーンをおく、「Bのアヒルさ

ん見ててな」と言う。

B児：食べずに保育者を見ている。

保育者：「Bのアヒルさん見ててなー、上手に食べるしな。」と言う。

B児：じっと保育者を見て、おもむろにスプーンを持って食べる

保育者：「あっかっこいい、いや、かしこい、Bちゃんかしこいなー。」と言う。

この後、他児との関係をつくりながらさらに食べることを促し、B児が食べるとほめる。

—〈エピソード7：動物マークを媒介とする働きかけの例 A児 23か月7日 1歳児クラス〉—

保育者はA児の背後から働きかける。A児の動物マークはリスである。

保育者：「Aちゃんお魚全然食べてないやん、お魚は？アーン」と言って、スプーン差し出す。

A児：小声で「イラン」と言って横向く。

保育者：「Aちゃんのリスさんのお口は？」と言って、スプーンを差し出す。

A児：口を開け、食べる。

保育者：「あー、すてきやなー、Aちゃん上手」と言う。

「拒否場面」において、子どもにマークの「動物」になったつもりにさせるなど、「動物マーク」をとり入れた言葉かけは第2過程においても観察された（エピソード3、4の斜体部参照）。そこでは、C児もA児も保育者の働きかけを拒否していたが、第3過程になると同様の働きかけを受け入れるようになった。これには、生活場面において「動物マーク」をはじめとする「自分の物」への関心の高まりやそれへの執着が顕著になってきたことが関係していると思われる。第3過程になるとB児は自分の人形を筆者に見せながら「Bノ、Bノ」と主張した。A児は自分の食べている物を「Aチャンノニンジンサン」と保育者に見せたり、自分の昼寝用の布団に他児が入ってくると他児の頭をこづいて怒ったりした。この頃から要求実現の際に自分の名前を使うといった自我の発達における変化（田中・田中、1996）が3事例ともに見られるようになった。また、食事終了後にエプロン等をバケツへ入れに行く場面で、C児は第2過程では、他児のバケツへ入れるなど自分の物やマークへの関心が薄かったが、第3過程になると、わざわざバケツを回し貼ってある自分のマークを確認してから入れるようになった。

これらのことから、動物マークが子どもにとって自我関与した物になっていることを前提に、それを媒介に他者との共感関係を結ぶようになることが示唆される。

⑥他児（他者）との関係を媒介とした働きかけ

次に、望ましい食事指導の一つとして金田ら（1990）の指摘した、他児との共感的関係づくりと同様の働きかけが見られた場面をエピソード8に示した。

—〈エピソード8：他児との関係を媒介とした働きかけの例 B児 20か月2日 1歳児クラス〉—

保育者はB児と机を挟んで向かい側から働きかけている。

B児が口の中のものを食べていると、保育者が言葉かけしながらご飯をすくってスプーンを差し出す。しかしB児は首を振り食べないので、さらに保育者がスプーンをご飯茶碗において食べることを促すと、次のように展開した。

B児：汁碗をさしだし「ナイ」と言う。

保育者：「これも食べて、こんだけ食べたなら、おかわり持ってきたげよ、パクッ」と言ってスプーンを差し出す。

B児：首を振る。

保育者：「イヤヤ、イヤヤばかりでー」と言ってスプーンを差し出す。

B児：首を振る。

保育者：「食べてやB」とスプーンをおき、「あっFちゃん（B児の正面：2歳2か月）食べはるわ、Fちゃんご飯食べはるわ、見ててや」と言って、F児に食べさせ、「Fちゃんかしこいわー」と誉める、そして「Bも食べて言ったげて」とF児に言うと、F児が「Bチャン、ガンバレ」と言う。

B児：S児を見て、スプーンを持ちご飯すくってる。

保育者：「Bも、かしこいかなー」と言う。

B児：食べる。

保育者：「いや、かしこーB、あーおいし、おいしいやろ、Bちゃん」と言う。

この後も、B児が自分からスプーンでご飯をすくって食べ、食べると保育者が誉める。

他児（他者）との関係をつくる保育者の働きかけに対し、第1過程および第2過程では子どもは拒否を示した（エピソード1、3ゴソック部参照）が、第3過程になるとそれを受け入れるようになった。保育者の働きかけを詳しく見ると、第1過程および第2過程では、他児の視線を保育者が強調しているのに対し、第3過程では保育者が他児の食事行動を誉めるといった「保育者－他児」関係を媒介にしている。したがって、単純には比較できないが、先に述べた、自分の物への執着が顕著になるなどの自我発達におけるこの時期の変化を考慮すると、他児との関係をつくる働きかけはこの時期から意味を持ち始めると考えられる。すなわち、「自分－保育者」という直接的な働きかけには拒否を示していても、「保育者－他児」の共感的関係を媒介にした働きかけによって、他児のように自分も誉められたくて自ら保育者との共感的関係を結ぶようになると考えられる。同様の特徴は、子どもが保育者への援助を求める場面でも見られた（エピソード9参照）。

— 〈エピソード9：保育者への援助を求める例 B児 23か月3日 1歳児クラス〉 —

B児はこの時期、自分でスプーンを使って食べることができており、保育者が食べさせる援助はほとんどなくなっている。B児は、ビデオカメラの側にいた筆者に食べさせてほしいと言葉で要求するが、筆者が対応しなかったので斜め右後ろにいる保育者の方へご飯茶碗を差し出した後、次のように展開した。

保育者：「どうしたの？」とB児の左隣へ来る。

B児：保育者にスプーンとご飯茶碗を渡す。

保育者：机上にこぼれていたご飯を見て「誰のご飯？」と尋ねながら、B児に食べさせる。

B児：食べる。

保育者：B児の左斜め隣の子どもに食べさせている。

B児：他児が食べさせてもらっているのを見て、「Bモピカピカチテー」と少しぐずりながらスプーンを保育者の方に差し出す。

保育者：「Bも？ちょっと待って、ちょっと待って」と言い、他児に対応している。

B児：「ピカピカミ（シ）タイー」と言い、スプーンとご飯茶碗を保育者の手元へ置く。

保育者：「ちょっと待って、自分で食べてー、自分で食べてー」と言う。

B児：「Bモピカピカチ（タイ）ー」と言い、ご飯茶碗を差し出す。

保育者：「ピカピカするけど、いっぱいあるしちょっと食べてて」と言う。

このあと、保育者はB児に食べさせる。B児はこの後にも食べさせて欲しいと要求し、茶碗とスプーンを保育者に差し出すことが見られた。

エピソード9では、エピソード8と同様の特徴である、他児への保育者の援助を見て「自分も」と要求すること、そしてこの時期は自分でスプーンを使い食べることができるにもかかわらず保育者への援助を求めていることが見られた。これは、食事という場が、単に食べるという生理的欲求を充足するための場にとどまらず、自我の発達と関連して他者との共感関係を結ぶ場へと新たな意味が付与されたことを示している。このような要求に対する保育者側の対応として、エピソード9では「Bも？ちょっと待って」という言葉かけだけにとどまっているが、他の場面で保育者が子どもの要求内容を言語化し確認することにより、子どもが待てるということがあった。したがって、子どもの要求にすぐには対応できない場合には、子どもの伝えたい内容を言語化して確認し、保育者が了解したことを子どもに示すことが重要になってくるであろう。

2. 1歳児の保育における食事指導上の留意点

食事場面における1歳児と保育者の相互作用を縦断的に見ると、1歳前半頃の保育者のつくる雰囲気と同調してしまう時期、1歳半ば頃からの自己と他者の要求を対比的に捉え始め、対提示に対し選択し始める時期、そして、1歳後半からの自我関与した物や他者を媒介とした共感的関係を結ぶ時期へと変化することが明らかになった。本研究の結果を表4にまとめた。

以下、1歳児保育の食事指導上の留意点を各時期ごとに整理する。

【第1過程】 この時期は、自分の要求と他者の要求とが混沌としており、子どもはその場の雰囲気と同調して保育者の働きかけを受け入れてしまうことが特徴である。1歳以降、幼児食が開始され、食べられる食品の範囲が広がる一方で、彩りの悪いものや食べ慣れないものへの抵抗が見られることなども食事指導上の問題になっている。したがって、アクセントをつけた言葉かけや歌にのせるといった保育者による楽しい雰囲気づくりは、1歳児が新たに出会う

表4 本研究の結果のまとめ

第1過程	第2過程	第3過程
<p>自分の要求とは異なる対応でも受け入れてしまう。</p> <p>↓</p> <p>保育者のつくる雰囲気と同調してしまう時期</p> <p>①アクセント ②歌にのせる ●[発達検査:鉛筆の対提示]両方とも取る。</p>	<p>自分の要求と他者の要求とを対比的に捉え始める</p> <p>↓</p> <p>→単純には、同調しなくなる。</p> <p>●[発達検査:鉛筆の対提示]一方を取る。</p> <p>↓</p> <p>自分と他者の要求を対比的に捉え、対提示に対し「選択」し始める時期</p> <p>③選択 ④限定</p> <p>◆生活場面: 自分の物への関心は薄い</p>	<p>◆生活場面: 自分の物への執着が顕著に。要求実現の際に「自分の名前」を使用。</p> <p>↓</p> <p>自我関与した物および他者を媒介に共感関係を結ぶ時期</p> <p>⑤動物マーク ⑥他者との関係</p>

注) 数字は、本文中に取り上げた保育者の働きかけの番号を示す。

「アクセント」：「大きいお口あ〜んってできるかな」とアクセントをつけた言葉かけとともにスプーンを差し出す。

「歌にのせる」：「Aちゃんのお口はどんなお口…」と歌いながらスプーンを差し出す。

「選択」：「これか？こっち？」と子どもに選択させる働きかけ。

「限定」：「これだけ食べたらいいわ」と食べる量を限定する働きかけ。

「動物マーク」：子ども各自のマークである「動物」に見てもらい、または「動物」の口で食べることを促す働きかけ。

「他者との関係」：他者が食べるのをほめながら子どもに食べることを促す働きかけ。

さまざまな食べ物の味や感触に舌を慣らしていく上で重要な働きかけとなるであろう。

【第2過程】 この時期は、自分の要求と他者の要求とを対比させて捉え始め、対提示に対し自ら選択し始めることが特徴である。田中・田中(1982)は18か月児は、見比べ、選べるような対(つい)になった場面を与えられると、その一方を自主的に決定し始める、と指摘している。したがって、「拒否場面」において子どもに「選択」を促す働きかけが重要であるとともに、子ども自身が何から食べ始めるか、次にどれを食べるかなど自ら選択できるような食事内容および食器の種類などを用意することが必要である。

また、この時期は、第1過程とは異なり保育者がつくる楽しい雰囲気には単純には同調しなくなる。そのため、「嫌いな食べ物」についての指導は、食べる量を限定するなど子どもにとって目標を捉えやすくし、「終わり」への見通しを持たせながら行うことも工夫の一つとなるであろう。

【第3過程】 この時期、「自分の物」に対する執着が顕著になることと関連して、自我が関与したものである動物マークや他児（他者）との共感関係を媒介とした子どもと保育者の働きかけが意味を持ち始める。1歳児の食事場面では、スプーンがうまく使えない時期には、食べさせる援助を行う際に必ず保育者と子どもの関わりがあるが、スプーンを使うことができるようになり、食が進む子どもの場合には、保育者の働きかけは少なくなっていく。しかし、スプーンを使って自分で食べられるこの時期に、子どもの側から保育者との関係を求めてくるようになり、そこへの配慮が必要である。つまり単なる食欲の充足ではなく、他者との共感関係を結ぶ中でそれが満たされることがこの時期の自我の発達との関連で非常に重要である。

以上、食事指導上の留意点を各時期ごとに提起したが、これらの有効性については、今後実験的な観察および横断的データにより検証していくことが必要である。

謝 辞

本論文を執筆するにあたり、貴重な時間をさいてご指導くださいました山田洋子教授に厚くお礼申し上げます。また、本論文における観察にご協力いただいた保育所（園）の子どもたちと保育者の方々に心から感謝いたします。

引用文献

- 金田利子・中山昌樹・井坂政子 1985 保育としての食事指導 1歳児保育の分析を通して 静岡大学教育学部研究報告 人文・社会科学編 36号, 37-60.
- 金田利子・井坂政子 1990 1歳児の食事における保育者と子どもの関係 金田利子・柴田孝一・諏訪きぬ編 母子関係と集団保育心理的拠点形成のために, 92-107.
- 木下孝司 1998 “ふり”が通じ合うとき—ふり遊びの始まりと心の理解— 秦野悦子・やまだようこ(編) コミュニケーションという謎 ミネルヴァ書房 151-172.
- 則松宏子 1999 食事場面における拒否行動と母子相互交渉—0歳から3歳の場合—日本発達心理学会第10回大会発表論文集, 458.
- 田中昌人・田中杉恵 1982 子どもの発達と診断②. 大月書店.
- 田中昌人・田中杉恵 1996 ビデオあそびの中にみる1歳児 解説. 大月書店.
- 外山紀子・無藤 隆 1990 食事場面における幼児と母親の相互交渉 教育心理学研究, 38, 394-404.
- 山田洋子 1982 0～2歳における要求拒否と「自己」の発達. 教育心理学研究, 30, 128-137.
(博士後期課程 2回生, 教育方法学講座)